自由民主党統合医療推進議員連盟　総会　2018／7／24

統合医療の核になる看護の可能性

統合医療とは、近代西洋医学を前提として、これに相補・代替療法、伝統医学などを組み合わせて、さらにQOLを向上させる医療であり、医師主導で行うものであって、場合により他職種が共同して行うものである。
（統合医療のあり方に関する検討委員会,2013.2）

原因療法と対症療法の両者の特性を最大限に活かし一人ひとりの患者に最も適切な『オーダーメイド医療』を提供する　（日本統合医療学会）

看護の基本は、自然の回復過程を整えることすなわち、生命を維持継続する日常的・習慣的ケア。（狭義の）医療とは違って、非侵襲的である。

安全性・有効性について質の高い科学的根拠がある主流の医学とCAM治療を併用すること　（NCCA）

患者を全人的にとらえ癒やしに焦点を当てて生活スタイルにも注目し、交流を重視(A.Weil)

川嶋みどり
社）日本て・あーて推進協会代表　日本赤十字看護大学名誉教授

統合医療と看護

現代西洋医学を否定せず、旧来のCAMの理念・手技を統合して未来医療を志向する。

基本理念

- 患者中心
- 全人的アプローチ
- 自然治癒力
- 予防

看護がこれまで追求し掲げてきた理念・課題と一致

補完療法ー看護

- 磁気療法
- リフレクソロジー
- 指圧
- レイキ
- ヒーリングタッチ
- 光療法
- 機能性食品・栄養補助食
- ハーブ療法
- アロマセラピー
- 運動
- リラクセーション
- 太極拳
- マッサージ
- 動物介在療法
- 読み語り療法
- ジャーナリング
- 祈り
- 瞑想
- バイオフィードバック
- ヨーガ
- ユーモア
- 音楽による介入
- イメージ療法

エネルギー療法

天然素材

徒手・身体療法

マインド・ボディ・スピリットセラピー

プレゼンス(寄り添う療)　治療としての傾聴　癒やしの至適環境づくりー看護

看護という営み

有史以来、人間のもっとも基本的な営みの1つ
そこに人間がいる限り、何時の時代にも、何処の国にも看護行為は存在し、思いは通い合う。

いのちを維持・継続する日常的、習慣的ケアは
暮らしの中で展開され、病人、高齢者、幼い人への愛と思いやりを基礎にして今もなお。

疾病構造の変化、医療技術の進歩、医療制度ににより、その専門性が求められているが、基本的理念は変わらない。

看護という仕事

赤ちゃんからお年寄りまで
あらゆる年代の人びとの生命と健康問題にとりくみ、
人間が一生に出会う大きなできごと
＜出産、病気、老化、死＞のあらゆる場面に
直接関わる専門職です。

不安を慰め苦しみを和らげ、どのような状態の
方たちでも、その方が人間らしく生きていくことができ
るように手助けします。

看護ー自然の回復力を調える

その真髄は生活行動援助にあり

その人の文化を尊重した個別ケアの規則性

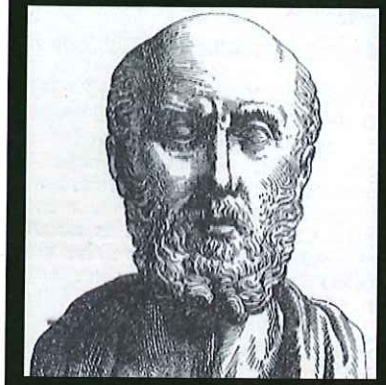
生命を維持する日常的・習慣的ケアの価値

安楽を図るケア→副交感優位のケア

プロセスもアウトカムも

気持ちよい　リラックス　ゆったり　安心　穏やか

医療の中の看護の優位性



ヒポクラテス(BC460-377)は、病気を自然現象として捉え、観察によりその原因を、食事その他の不摂生、不健康な職業、季節、気候不順とした。身体の平衡の乱れが病気であると考え、症状を生体の防衛能力の現れとみて、それを支援することを原則とした。＜病を医するものは自然なり＞＜助力せよせめて損なうな！＞＜自然治癒力を崇めよ＞と述べた。

ナイチンゲール(1820-1910)は、＜病気は回復過程＞であるとして、看護とは「新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し、管理すること－こういったことの全てを”患者の生命力の消耗を最小にするようにととのえること”を意味すべきと述べた。

自然治癒力は生活行動力を高めること

自然の回復過程を調える基本

3つの要素
- 「そばにいる」
- 「聴く」
- 「触れる」

条件：ケアをする人の感性と知性と優れたわざ

受け手の生理的な現象：副交感神経優位

⇒免疫力アップ

主観的なアウトカム：気持ちよい　安心　穏やか

「人間らしく生きる」を援助

＜暮らし－生活＞
一定の社会的状況のもとで各種生活手段を用いながら、その充足をめざして各種の生活行動を選択し遂行する過程　（松原）

居住空間のもとで、生活行動の基礎となる食物の調理を始め、水、火,照明の管理、生活空間の清掃、衣服の洗濯等、人間が人間らしく暮らしていく上での最低限の条件を満たす
　→ 暮らしの営み
　代行可能 → 社会化され分業化　外食産業　家事援助

だが、決して代行できない営みもある⇒個体レベルの生活行動

その人らしく生きるを援助する
個体レベルの生活行動と文化

「息をする」「食べる」「身体をきれいにする」「トイレに行く」「眠る」
などなど、生命維持に関連する営みと、
「身だしなみ」「コミュニケーション」「移動・動作」「学習や趣味」など、
生命とは直接関わりない営みがある。
両者とも人間らしくあることに欠かせない個体レベルの営み。
　普通であれば個人が自ら行うことのできる日々の営みで、他人が
これを代わって行うことはできない。まさに誰もが毎日行っている
ありふれた営み―地域の伝統、家族集団の習性、習慣が媒介。

一方、高度医療技術は

生体情報の飛躍的な増大(質・量)と高速処理
蘇生術のシステム化・高度化　顕微鏡下手術装置
人工臓器　放射線治療の進歩
高齢者・新生児を含むハイリスク患者への挑戦
体外受精　遺伝子操作　ヒトゲノムの解明
iPS細胞の出現による再生医療の可能性など

変貌する現代医療

現代医療の様相の一端を、外来診察室で見ると臓器別診断を主眼に、各種検査を実施し、原因を追求している。

見ない、聴かない、触れない診療パターン

夜中に急に首が痛くなり動かせず、目も痛くなって市の中央病院に行った。検査4種、薬5種、病院に滞在時間7時間。その間、首の何処がどのように痛いかの触診は指1本もなし。帰宅後、様子を見に来て下さった隣人が、気休めにと貼ってくれた湿布薬で2日間で治癒。結局、病名もわからず「なんでしょーね」

2015年の年賀状から

効率性に価値をおく医療風土で看護もまた

その人のニーズに真摯に向きあう看護の姿を変容
ディスプレイの情報でアセスメントし　オーダーメイドのケア計画により
訴えよりもデジタルなデータ依存に終始し　個別の背景よりもバーコードで
本人確認するなど

手で触れ、癒やし、慰める方法から遠ざかった

直視しなければならない患者の苦しみ
耳傾ける必要がある家族の声

要素還元的な医学に基づく治療の限界を超えて求められる

原因不明の疾患
不治永患状態
救命後のそれから先の生

} 全人格に寄り添うケア

現代医療の歪みの中で

＜看護が看護に専念できない不幸＞

◇チーム医療の名のもとに看護をよりいっそう狭義の医療へ → 医師不足対策

◇慢性的看護師不足により看護実践量の低下

看護師は確信が持てず、患者は情報を持たない。

◇最大の要因は、現行の診療報酬制度

◎看護の怠慢が医療収入を生む？矛盾

◎介護報酬制度はあっても看護報酬制度なし

大腿骨頸部骨折の高齢者入院

75歳以上
寝たきり状態が続いている
見当識レベル低下
経口摂取不能
会話なし

上気道感染症リスク

骨折のみの看護計画
上気道感染症発生 → 胸部レントゲン
吸引　喀痰培養　抗生剤投与　輸液
その他、診療報酬発生

優れた看護チームの対応

3時間おきの体位変換
1日4回のマウスケア
徒手排痰法（スクィージング、ドレナージ）

何も起こらない
QOL向上

診療報酬ゼロ

薬を与えることは何かをしたことであり、空気や暖かさや清潔さを与えることは何もしないことである、と言う確信が何と根強く行きわたっていることか(1860 FN)

暮らしの中の統合医療

☆人の手を借りずに行うことのできるセルフケア

☆生命を維持する日常的習慣的ケアー生活行動

ごく普通にそれができている状態 → 健康

☆健康という視点からのその営みについての助言支援

呼吸法　食べ方　寝方　入浴の方法　姿勢の保持　歩き方

ストレスマネジメント　コミュニケーション

☆人生の全過程において健康に生きて行く上での処し方

☆病気や障害があってもその中に意味を見出す生き方

医学モデルからの脱皮と生活モデルへの発想の転換

被災の臨場で感じた

医療の概念の変化の必要

津波に溺れた高齢者のいのちを救ったのは？

高度医療ではなく、看護学生の「真心」と「手」であった。

＜発想の転換＞

治す医療から自然の回復過程を整える医療へ

キュアからケアへ　治癒からQOLへ

高度急性期医療 → 在宅にシフトするありよう

脱器械化　脱薬物依存　　効率性から人間性への転換

その具体的な手法が手を用いたケア →て・あーて. TE-ARTE

自然の回復過程を調える“て・あーて”

3つの要素
- 「そばにいる」
- 「聴く」
- 「触れる」

条件：ケアをする人の感性と知性と優れたわざ

受け手の生理的な現象：副交感神経優位

⇒免疫力アップ

主観的なアウトカム：気持ちよい　安心　穏やか

手のケアは暮らしの中にも

幼い子
弱い人
困っている人
高齢者
障害のある人

関心を寄せ
何とかしたい気持ち

↓

ケア

原始時代、人類が始まったばかりの頃から始まり、
ケアの心の表出として手を用いた。
日々の暮らしの営みの中にもケアの心が…

手のケアを媒介の心のケアの確かさ

受診を勧めても応じない元漁師(70歳ー独身)　仮設住宅居住
収縮時血圧200以上　昼食は醤油かけご飯副菜なし　煙草1日30本
両上・下肢循環障害　冷感　感覚鈍麻

両手のマッサージ　約30分　次第に温かくなり、暗紫色 消退
両足のマッサージ　約30分　「生まれて始めてこんなことしてもらった」
ー言葉が豊富になり、被災前の生活のこと、受診体験のことを話し始める。
タバコを減らすこと。納豆や卵も食べること。醤油かけご飯は止めること →
頷きながら聞いている。手の指先を見つめながら「ひょっとしたらギターが弾けるかも」　爪弾きができた。嬉しそう。
「だが、医者には行かん、山草でつくった薬がある」と、帰り際の私に冷蔵庫を開けて見せた → 冷蔵庫を他人に見せる信頼の証

状況を契機にして

被災地の現状の直視から
近代西洋医学の成果と限界が克明に
キュアからケアへの方向転換
看護は、より医療に傾く専門性を求めるのか
看護独自の立場を貫くのか…
→ 統合医療における看護の可能性

被災地支援モデルて・あーての家専門職ボランティア拠点

多彩・なでしこ茶論　七年間

蓮の花笑い

健康・暮らしよろず相談：常時
キラリサポーター育成講座
さよならメタボ　ロコモバイバイ
て・あーて塾　やすらぎコーナー

顎下腺刺激

ポコちゃん先生

ピンピンキラリと美しく老いを生き　介護先延ばし
隣人の安否気遣う優しいまち
健康長寿の東松島モデルを全国発信！

ハンド・フットケア

変形著明な爪のケア　他人に足など見せられないと言っていたのに行列ができる程、信頼関係の証し　爪切りは血行促進

被災地の条件を転化した長期計画

医療に依存しない自然治癒力を引き出す

コミュニティ交流支援

生活習慣改善
セルフケア

賢く食べて
上手に眠り
楽しく動き
足腰元気

健康に生き
美しく老いる

多世代交流
他人を気遣い
見守る
認知症子育て

やさしいまち
住み続けたいまち
災害に強いまち

専門職　連携・活用

健康長寿　介護先送り

地域力・住民力・リーダー力

健康教室　健康太極拳　なでしこ茶論　住民力育成講座
やすらぎコーナー　いきいきほっとサロン　各種講演会

地域に根づくケア構想

従来医療の脱皮
- 概念的にもシステム上からも
- 医学モデル→生活モデルへ
- 治癒→QOLへ

無関心→相手を気遣う心

孤立→コミュニティ

統合医療の出番

↓

看護に何ができるか

医療・福祉
看護・介護

システムの包括化

隣人の安否気遣う暖かい町

多世代交流 → 赤ちゃんからお年寄りまで
お節介ではない関心と、支え支えられる関係が生き甲斐に

子育ての親を支える
地域で育てる　介護する

専門職の知恵を活かし地域力を強める

統合医療を根づかせる条件

地域、コミュニティの歴史の中に潜むヒント　個人・家庭
人びとの暮らしの中の智恵と経験を発掘
年月による検証を重ねた方法を言語化・共有
専門的治療の要否を判断する能力育成
年齢に応じて　いのち、健康に関する教育

統合医療チームは、健康問題別チーム医療へ

実践知としての災害支援専門職ボランティア

組織化された枠組みの強い病院的発想から脱して
即時的判断とオリジナルな発想の求められる災害支援
過去の経験を風化させず活かしきることの大切さ
　原爆投下直後の長崎の被災者⇒永井博士の直言
阪神淡路大震災、東日本大震災　原発事故等々で活かされたか。
西日本業災害においてもなお…
被災地における限られたエリアで、同じメンバーが継続して積み上げた実践知は、未災地域のこれからの看護に活かせる可能性をもっている。

要検討事項：権限の委譲　活動資金の流れ

惜しみなく手を用いて
自然治癒力を引き出す看護の力を統合医療の核に

看護本来の力を取り戻すためにも

ご静聴ありがとうございました

ケア提供の場を核としたコミュニティモデルを東松島から

社）日本て・あーて推進協会
て・あーて/TE・ARTE®

人間らしく生き
自分らしい暮らしの追求

治す医療から
治る医療へ（自然治癒力）

＜“医療”の概念の根本的変革＞

省エネ・「脱」機械化医療への道

特養
復興住宅
在宅
災害公営住宅

在宅
多世代交流
赤ちゃんからお年寄りまで
小規模多機能
ヘルパーステーション

認知症も安心
障害者に優しい
地域で子育て
安心介護

他人を気づかうやさしい町
暮らしつづけたいコミュニティ
災害に強いコミュニティ

“生活モデル”の医療
統合医療

地域完結型　住民参加型

医療機関
病院 クリニック
訪問看護

地域住民のニーズに添ったケア拠点

て・あーて東松島の家

介護先延ばし塾　ぴんぴんキラリと美しく老いる
キラリサポーター　地域の健康アドバイザー

触れる手
癒やす手
あいだをつなぐ手

健康レストラン
薬膳レストラン

栄養合理性
おいしい食事

安全な食材を生産する
農業・食糧政策　地産地消

地産地消

かしこく食べて　上手に眠り
楽しく動いて足腰元気
元気引き出すステーション：
健康長寿の延伸

質の高い看護･介護
ケア提供者育成
東北て・あーて塾

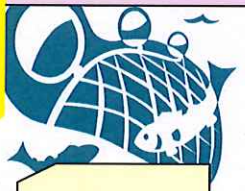
人材育成サポートプログラム

なでしこ茶論　多賀城　山王仮設
東松島矢本運動公園仮設

ヨーガ　太極拳　マッサージ
爪切り健康法　フットケア

活動支援者・団体

・”東日本これからのケア”への夢に賛同して下さった全国のみなさま
・日本看護科学学会
・日本看護協会
・日本訪問看護財団
・株式会社ナノエッグ
・杉浦地域医療振興財団
・多田記念財団
・東松島市



沿岸漁業の復興

しごくありふれた日々の営みを支援する専門職

おいしく食べるケア
感染予防
口腔ケア
排泄ケア
清潔ケア
活動のケア
睡眠のケア

被災地における先進的ケアに学び
これからのケアに有用な技術の精錬と普及

看護独自のアプローチ－統合医療

放射線被爆の人体への影響
生命と健康の視点から
情報の収集と対策

2011／5 作成　2014／5 改変　（川嶋）